

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

八分十四秒が気づかせてくれたもの

美川中学校二年

中野 なかの

夏衣 なつい

一秒一瞬の大切さを感じた八分十四秒と、それにたどりつくまでに流した汗と涙の時間は、本当にかけがえのないものだった。

私は吹奏楽部に所属している。小学校のときから憧れていた吹奏楽だったが、どの部活よりも練習量が多く、ハードな毎日だ。それでも、長い時間かけて仲間と共に一つの音楽を作りあげていく楽しみは、他では味わえない達成感がある。

去年、吹奏楽の甲子園といわれる、「東日本吹奏楽大会」で銀賞を受賞した。私はその時一年生だったため、このすごさがよく分からなかった。でも今年、メンバーに入れたからこそ、先輩方の素晴らしさと悔しさが分かる。リベンジしたい。その一心だった。

今まで何度も、金賞をとり全国へと進めたことのある顧問や、外部レッスンの先生の怒鳴り声が毎日のように音楽室に響きわたる。泣き虫な私は、毎回の合奏で怒られる度に涙を見せた。私の音で先輩や同級生に迷惑をかけた。すごく悔しかった。あなたの音はもういらぬ、と言われる気分だった。それに、怒られたぐらいでこんなに傷付く自分の心は、まだまだ子供であったことを、改めて感じた。

「できていない奴は人一倍努力をしろ。そして、できている奴を追い越せ。」これは、ある日の合奏中での顧問の言葉である。私は、なるほど、と思ったが、一つの疑問があった。できていない人が人一倍努力しただけでは、できている人を抜かせないと思っただことだ。当然私は、できていない人だ。だから、人一倍ではなく、人十倍努力することにした。できていない人に少しでも近づけるために、これ以上迷惑をかけないように、自分なりに精一杯の努力をした。毎日朝から晩まで合奏をして、家に帰ったらすぐ寝るのではなく、腹筋を何度もしたり、音源を聴いて音楽の勉強をしたりした。毎日毎日キツイ日々が続いた。先輩も先生も、コンクールの日が近づくにつれ、さらに厳しさを増した。ピリピリした空気に、ついていくのに必死だった。何度も心折れそうになって、何度も楽器を責めて、もう吹きたくなかった。それでも、部活を辞めたいと思うこと

は一度もなかった。こんな苦しい練習でも、部活の仲間がいれば、楽しかった。常に笑顔で、自分らしくいられた。みんなと過ごす日々がすごくすくなく貴重な時間に感じられた。だから、合奏の音も日に日に良くなっていったような気がした。「団結」というのは、このことなんだと心の底から思った。

「タイムオーバーで失格となりました。」この言葉を聞いた瞬間、世界中の全ての時計が止まった気がした。生まれてきた中で、一番信じられない出来事だった。信じたくもなかった。何がどうなっているのか分からず、視界が大粒の涙であふれた。今まで、苦しいことがあってもこらえてきたものが、その瞬間全て流れ出た気がした。たえられなかった。どんなに厳しい合奏よりも、つらかった。毎日毎日、大切に積み重ねてきた練習は何だったのか、と思った。

その時、顧問が大号泣の吹部全員の前で話をした。「今まで、毎日苦しい練習にたえてくれてありがとう。結果はもう変わらないけれど、みんなの努力は決して無駄じゃない。審査員全員が一位をつけてくれた。みんなの音は審査員にしっかり届いてた。そして、タイムオーバーになってしまったのは、私の責任です。先生をいくら責めてもかまいません。」涙が止まらなかった。人十倍した努力は実ったのだと思っただ。怖くて厳しいけれど、この先生について行って良かったと思う。ただ、もうどんなに泣いても悔やんでも、結果はタイムオーバーという文字だけ。十四秒といういつの間にか過ぎてしまう、この時間が大切な想い出となった。去年のリベンジをするべく、人十倍努力した毎日。結果が出なかった。

でもそこで悔しんでいては、前に進めない。だから前向きに、来年の目標、東日本大会で金賞。部員四十八人全員が想ったことだ。

私は、泣き虫な性格を変えること、そして来年よりも、もっと努力するため副部長になった。今は自分のことだけで精一杯。パートや部全体のことを考えながら毎日の練習が始まるうとしていく。人十倍努力では顧問の怒りには耐えられない。きつとそこでまた、泣いてしまう。みんな

なに迷惑をかけてしまう。だから、私は人百倍努力する。口だけではなく行動に移していく。

一秒一瞬を大切にして、人百倍努力して、東日本大会金賞。絶対叶えてみせる。そういうことを感じさせてくれたのは、八分十四秒の短い時間だ。きっと神様が今の私たちに与えたかったもの。気づかせてくれて、感じさせてくれてありがとう。

